

研究授業「保育原理 I B」の実施

田 中 崇 教*

Enforcement and reflection of an open class “childcare principle I B”

Takanori Tanaka

(Abstract)

This paper is the record of an open class performed for the first time in the Department of Early Children Care and Education of Takamatsu Junior College on December 4th, 2007. The main topic of this lecture was a characteristic of the modern childcare thought. In the class of every time, “learning sheet” prepared for by a teacher is used. Advices for improvement were suggested by members of the Department.

key word : an open class, lesson research, childcare principle.

はじめに

本稿は「保育学科における Faculty Development 活動の実施」(大学教育高度化推進特別経費 平成 19 年度教育・学習方法等改善支援経費)の一環として実施された「保育原理 I B」の研究授業に関する報告である。

本学保育学科は、授業改善を目指した研究授業ならびに授業検討会を平成 15 年度以降継続的に実施している¹。これらの取り組みを通して、保育学科内には自らの授業を公開し授業力を高めようとする雰囲気と同時に、授業改善を目指して互いの意見を交換し合うための場がすでに構築されている。それは、研究授業への保育学科専任教員の積極的な参加状況や授業検討会での活発な議論からも確認される。

* 提出年月日2008年6月30日、高松短期大学保育学科講師

¹ 本学保育学科の研究授業は今回で11回目を数える。

こうした状況下において、本研究授業は平成19年度保育学科研究授業の第二回目²として行われた。

1. 研究授業の日程

研究授業ならびに授業検討会は、次の日程で開催された。

(1) 研究授業

日 時：平成19年12月4日（月）第4校時（14:40-16:10）

場 所：本学西館 A31 講義室

科 目：保育原理ⅠB

担 当：田中 崇教

受講生：本学保育学科1年次生（70名）、保育士資格の必修科目

(2) 授業検討会

日 時：平成19年12月4日（月）第5校時（16:20-17:50）

場 所：本学西館 保育演習室

2. 「保育原理ⅠB」の基本的性格

「保育原理ⅠB（以下、本授業科目）」は、保育士資格取得に必要な「保育の本質・目的の理解に関する科目」の「保育原理」に位置づく。特に本学では、保育学科1年次生に対し、前期に開講される授業科目「保育原理ⅠA」（担当：松原勝敏本学発達科学部教授）と併せて本授業科目を保育士資格取得のための必修科目として課している。なお、両科目はともに講義形式をとる。

授業内容は、「保育原理ⅠA」の授業担当教員と事前協議を経て「保育原理」の領域を分担する形式で編成されている。本授業科目は主として「保育方法」、「保育計画」、「保育者論」、「保育の歴史」の領域を担当するのだが、必要に応じて「保育原理ⅠA」の学習

² 19年度の第一回目は、小西博子講師による授業科目「図画工作Ⅰ」であった。

領域を確認しながら授業を進めることもある。このことは「保育原理ⅠA」においても同様のことが言えるだろう。なお、使用テキストは「保育原理ⅠA」と同テキストの森上編(2007年)である。

「高松短期大学2007年度シラバス」では学生に対し本授業科目を次のように紹介した。

「保育原理ⅠBでは、子どもの見方、保育の考え方、保育の歴史に関する基礎的知識を身につけると同時に、今日の少子化社会の進行や子どもを取り巻く様々な環境の変化の中で多様化する保育ニーズにも目を向けて欲しいと思います。そして、本講義を通じて、これから保育現場に出ようとするあなた方には『保育者は子どもが好きだけではとても勤まらない』ということを実感するとともに、保育者としての基礎知識と意欲・態度を形成して欲しいと思います。」

本授業科目のねらいは、受講学生(保育学生)に「保育に関する基礎知識」、言い換えれば「専門職保育者として習得すべき基礎知識」を身につけさせることと同時に、「保育者としての意欲・態度」を形成することにある。

3. 受講生の状況と学習指導上のポイント

3.1. 受講生の状況と直面している学習指導上の課題

受講生は保育学科1年次生全員(70名)である。先にも述べたとおり、本授業科目は本学における保育士資格取得のための必修科目だが、卒業要件には位置づけられていない。しかし、保育学科の学生たちは在学中に幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方を取得することを目指しており、例年、保育学科1年次生の全員が受講している。

二年間という在学期間中に幼稚園免許と保育士資格の両方を取得することは、学生の側に立てば、非常に過密な時間割を組み立てなければならず、必然的に「空きコマ」がほとんどない状況になることを覚悟しなければならない。また、そうした過密なスケジュールでは、予習・復習にあるいは自発的な学習活動に費やす時間が十分に確保されない弊害が生じてしまう。加えて、近年多くの高等教育機関で問題視されている学生の基礎学力の低下傾向に鑑みた対策が本授業科目でも講じる必要に迫られている。

以上の問題状況に鑑み、本授業科目における指導上のポイントを次のように設定した。

①講義時において内容上の要点を学生に明示すること。②学生が本授業科目（各回の授業）を復習する際、容易に要点を概観できる教材を作成すること。③授業毎時における課題を課し、取り組ませることを通して、学習習慣の定着を図ること。

3.2. 学習指導上のポイント―「授業ノート」による学習能力向上への試み―

これら三つのポイントを集約させた試みが、学生に「授業ノート」を作成・提出させる取り組みである。「授業ノート」とは、授業毎時に学生一人ひとりへ配布する授業担当教員によって構成されたA4版の用紙（1枚）であるが、その構成内容を以下に詳述する。

「授業ノート」は両面構成になっており、片面は毎回の授業での板書事項や口頭による要点説明等を記録させる「講義記録面」である。ノートに記述すべき（板書）内容は、毎時の講義内容を要約したものであるが、授業終わりにノート一面に記述できる程度の量を精選している。もう片面は、本時の授業における参考資料ならびに課題シート等が準備されており、授業内容の補完や発展が企図された「資料・課題面」と名づけている。また、この面の空きスペースに質問等を学生に記入させ授業担当教員が応答する取り組みも行っており、「授業ノート」を通して授業担当教員と学生間との交流を図る面として活用している。

授業担当教員は、授業終了時毎に受講学生に「授業ノート」を提出させ、毎回到わたって点検する。点検事項は次の二点である。①講義（板書）内容が正確に記録されていること。②「資料・課題面」に準備された課題に対して誠実に取り組んでいること。いずれも、授業に取り組む真摯な姿勢を評価したいという意図が授業担当者にある。この点検・評価は、出席点として期末の成績評価に反映させている。

「授業ノート」は、授業（板書）を記録した学習教材という役割を担っているだけではない。それは、研究授業の参観者からいただいたコメントによっても確認される。

例えば、ノート提出を授業毎に課すことにより、「きちんとノートをとらなければ」という緊張感を受講学生に持たせる。また、受講学生の「授業ノートを用紙一面に記録したという行為（課題を提出した行為）」が、学生自身に受講の達成感を抱かせる。さらに、授業担当者によってチェック・コメント記入された「授業ノート」の返却が、学生に「学習成果（努力の成果）が教員に認められた」という学習充実感を芽生えさせ、学生と授業担当教員との間の相互交流を促進する。

以上のような参観者のコメントより、「授業ノート」は授業毎時における受講学生の努

力が授業担当教員によって認められた「証明書」という役割を担っているといえよう。すなわち、本授業科目は「授業ノート」を活用することによって、受講学生の学習能力のみならず学習意欲の向上の要素が垣間見られるのである。

4. 本授業科目の進行状況と本時の概要

4. 1. 本授業科目の進行状況

本授業科目の進行状況は以下のとおりである。なお、授業科目「保育原理ⅠA」との分担協議に基づき「高松短期大学 2007 年度シラバス」に記載した「授業計画」から一部変更した箇所がある。

第一回（10月1日）「オリエンテーション+保育という行為をどのように考えるか」

第二回（10月5日）「保育の内容・方法の原理—子どもの発達を理解する」

第三回（10月11日）「保育の内容・方法の原理—子どものための保育内容」

第四回（10月22日）「保育の内容・方法の原理—子どものための保育方法」

第五回（10月29日）「保育の計画と実践の原理—保育計画と指導計画」

第六回（11月5日）「保育の計画と実践の原理—幼稚園教育要領と保育所保育指針」

第七回（11月12日）「保育の計画と実践の原理—幼児の活動を予想することの意義」

第八回（11月19日）「保育の計画と実践の原理—実践を想定した環境構成の意義」

第九回（11月26日）「保育の歴史—近代の欧米保育施設と保育実践」

第十回（12月3日）「保育の歴史—近代保育思想の特徴」*本時、研究授業

第十一回（12月10日）「保育の歴史—近代日本の保育施設と保育実践」

第十二回（12月17日）「保育者論—子どもとの関わりの中で求められるもの」

第十三回（1月16日）「保育者論—保護者や社会の中で求められるもの」

第十四回（1月21日）「保育者論—成長すべき人間としての反省的実践家論」

第十五回（1月29日）「期末試験」

4. 2. 本時の概要

本時（研究授業）は「近代保育思想」の特徴をテーマに設定し、次のことを授業内容の中核に据えた。①近代の保育（教育）観や子ども観の形成に重要な役割を担った三名の思

思想家「J. J. ルソー」、「F. W. A. フレーベル」、「M. モンテッソーリ」それぞれの思想の特色と思想的系統性について整理・紹介する。②受講学生がこれからの自身の保育観を形成する際に参考にできるような知見を多様な観点に基づいて提供する。

まず、導入部分では前回の授業内容（18世紀以降の欧米で確認される保育施設の興隆）を確認し、その背景となる時代状況（産業革命・啓蒙思想）を紹介した。必要に応じて世界史の資料を提示し、受講学生の理解の向上を図った。

展開部分では、まずルソー、フレーベル、モンテッソーリの個々の思想の特徴と関連事項（著作等）ならびに三名の思想的系統性紹介すると同時に、「社会改良思想」という近代保育思想の同時代的特徴について説明した。さらに、こうした三名の保育思想や保育実践が、時代を越えて現代のわが国の保育観（子ども観）に影響を及ぼしていることを話題提供した。とりわけ三名の保育思想や保育実践を受講学生に（遠い過去の思想的遺産ではなく）身近な地域で取り組まれている実践として感じさせたく、香川県下において先述した思想家の保育実践を取り入れている幼稚園や保育所の事例を紹介した。

終末部分（まとめ）では、導入部分で用いた時代状況の一側面として、先述した思想家の保育思想や保育実践が捉えられることを説明した。最後に、「子どもにとっての『よき』保育環境」をめぐる議論が近代保育思想と現代の保育実践の結節点の一つにあることを提起して、授業を終えた。

5. 授業検討会ならびに授業参観記録に寄せられたコメント

研究授業終了後に開催された授業検討会ならびに「授業参観記録」を通して授業担当者に寄せられたコメントを、本学所定の「授業参観記録」様式に従いまとめておく。

(1) 教育内容

本時における授業内容をルソー、フレーベル、モンテッソーリの三名に限定し、近代保育（子ども）思想のエッセンスを整理した点は、受講学生の理解度にふさわしいという評価を受けた。

授業改善に関わる点として、授業内容に「比較的高度な学問内容」を説明・提示した点に関する指摘があった。時代背景と保育思想（保育観・子ども観）との関係について説明する際には、学生の理解度合いを確認しながら提示内容・方法を工夫すべきであるという

意見であった。しかし他方で、保育思想が簡潔にまとめられ（表層的）過ぎており、学生が身につけるべき教育内容としては物足りないのではないかとの指摘もあった。今の時代だからこそ、保育思想の根本的部分を学生に習得すべきという意見として受け止められる。

(2) 授業方法

「授業ノート」を活用することは、授業担当者の意図も含めて概ね肯定的な評価を受けた。また、授業担当者の「声量や話し方」、「補足資料を用いての説明」、「板書」等についても学生の授業理解を高めようとする教員の配慮が感じられるとのことであった。

他方で、授業改善にかかわる点として「板書内容を提示（消去）するタイミング」、「テキスト（森上編（2007））の運用」、「『授業ノート』の回収点検と学生の復習作業との間に生じる不整合性」に関する指摘があった。さらに「授業担当者と受講学生の間の双方向的な講義形式」に関する問題提起もあった。

(3) その他

受講学生に学習習慣（受講する態度）が身につけているとの評価を受けた。他方で、保育思想（理論）と現在の保育実践（実践）との接点に関する話題提供の要望、さらに授業担当者の顔が見えるような、より個性的な授業を望むとの意見もあった。

6. まとめ

本授業科目は、現代の保育を支える基礎理論を理解するために設置されたものであるが、保育の思想、歴史、制度・方法などを主な教育内容とする。そのため、ややもすれば苦手意識を抱く学生も例年少なくなく、学生の興味関心を惹きつけやすい内容とは決していえない。さらに、ここ数年来の保育学生の学力低下傾向にと相俟って、授業により一層の工夫が求められるようになってきた。

そこで、本授業科目は受講学生の基礎学力向上と学習習慣の定着を目指し、「授業ノート」の導入を試みた。この「授業ノート」の取り組みについて受講学生に一定の効果が確認されたと同時に、保育学科教員から一定の評価を得ることができた。だが、現在の取り組みに問題が散見されることも明らかになった。とりわけ今回の研究授業を通して、授業

ノートの改善方途に関する多くの示唆を頂いた。

一方で、教育内容の改善に関わるコメントも数多く頂いた。いずれのコメントも極めて示唆的であった。授業担当者が本学に赴任して二年を迎えるが、自らの授業を省察するための絶好の機会であったように思われる。

保育に関する基礎知識を受講学生に分り易く確実に伝えることを、授業担当者は本授業科目における指導上の主眼に置いている。確かに、時には授業の中で受講学生が能動的に学ぶ自己学習作業などを取り入れることも必要であろう。ただ、そのような方法が効果的に実施されるには、受講学生に学習習慣が培われている必要があると考える。実際に、授業担当者は保育学科2年次生を対象とした授業科目「保育環境論」や授業科目「保育原理Ⅱ」³で、自己学習作業や教員と受講学生との間の双方向的授業を取り入れているのだが、本授業科目においても効果的に導入する可能性を探る必要はあるだろう。今後も、受講学生が保育者として成長するための授業づくりを目指し、さらなる改善を図っていきたい。

最後に、研究授業・授業検討会にご参加くださり貴重なご意見を頂いた諸先生方、ならびに研究授業にご協力いただいた受講学生に心からお礼を申し上げたい。

参考文献

- 森上史朗編『保育原理[第二版]新・保育士講座①』ミネルヴァ書房、2007年。
石垣恵美子・北川明編『はじめて学ぶ幼児教育』ミネルヴァ書房、2005年。
実践的ソフトウェア教育コンソーシアム編『教育デザイン入門—大学教育とFDプログラム』オーム社、2007年。
土持ゲリー法一『ティーチング・ポートフォリオ—授業改善の秘訣』東信堂、2007年。
山地弘起編著『授業評価活用ハンドブック』玉川大学出版部、2007年。

³ この二つの授業科目は、本学において2年次に開講される保育士資格取得のための選択科目に位置づく。授業担当者はいずれも筆者である。

高松大学紀要
第 50 号

平成20年 9月25日 印刷
平成20年 9月28日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811